

山と博物館

第43巻 第4号 1998年4月25日

大町山岳博物館

増村 征夫 写真展

星の降る里

四月十二日(日)～五月十七日(日)



写真と文 増村 征夫

安曇野は街の灯が少ないので、星空がとても美麗です。遠くへ撮影にゆき、帰りが夜になつたときふと気づくのですが、星が降っているかに見えるのです。

安曇野の周囲には、星空の展望台ともいえる美ヶ原や北アルプスがあり、私は折りをみては星空を撮影に出かけます。撮影をしながら星空を眺めているのですが、日常とは違う、いろんな体験をします。

たとえば、青白い星や赤い星がまたたく様子を見ているうちに、かすかに広大な宇宙の息づかいを感じ、自分がその星空へ吸い込まれてゆくような感覚に陥つたことがあります。

また、降るような星空の下に雲海が広がっていて、ところどころ、安曇野の灯が見えていることがありました。まるで、宇宙船の窓から地球を俯瞰しているような眺めです。

家にいるときも、いつも星空を気にかけています。夕暮れになると、窓から見える北アルプス北部の白馬連峰から南部の蝶ヶ岳の空に星が散りばめられてゆきます。私は、その様子をいつも眺めていました。そうしていると、つらいことがあつても忘れてしまい、心はいつのまにか、妙に懐かしい星空へ解き放たれてゆくのです。

写真展『星の降る里』より抜粋

増 村 征 夫

お変わりありませんでしょうか。

この前、安曇野で綺麗な星空が撮影できました。君に見てほしくて、写真を贈ります。

そのときは、星が降ってくるような夜空のなか、いつのまにか川霧が湧いてきて安曇野が白いペールに包まれてゆくのでした。シャッターを切りながら、私はその幻想的な景色を見つめています。撮影できたことを喜びつつ、たった一人で眺めていて、何だか申し訳ない気がしたものでした。



安曇野の犀川ダム湖に小白鳥を見に行つて、以前に見た、釧路湿原の丹頂鶴を思い出しました。求愛のボーズや、ほほえましい挨拶などの仕草が、どことなく似ていたのです。川に手を入れてみたのですが、まだまだ凍りつくような冷たさでした。



お姿にほのぼのとしたを感じました。小白鳥は、日を追つて幾つかの家族が集まり、より高く、より遠くへと練習飛行を重ねます。そしてある日、越冬した犀川ダム湖の上でV字型の編隊を組み、クワーケワーと、哀愁を帯びた鳴き声を残して北の空へ消えてゆくのです。

小白鳥を見送つてから半月ほど経つた三月半ばに、彼らのいなくなつた犀川ダム湖を歩きました。ネコヤナギの、銀白色に輝く花芽から紅い雄しべが顔を出し始めました。動植物が季節の移り変わりに敏感であること

しかし、小白鳥たちは春の気配を察知しているのでしょう。北帰行のための練習に余念がありません。頭から首にかけて、少し灰色の毛が残っている幼鳥をかばうようにして飛ぶ姿に、ほのぼのとしたを感じました。

小白鳥は、日を追つて幾つかの家族が集まり、より高く、より遠くへと練習飛行を重ねます。そしてある日、越冬した犀川ダム湖の上でV字型の編隊を組み、クワーケワーと、哀愁を帯びた鳴き声を残して北の空へ消えてゆくのです。

春の雪が降りました。安曇野の春は好天と悪天が順ぐりにやってきます。暖かさが一進一退します。寒さには慣れているのですが、立夏を間近にひかえて雪になると、驚きます。

この雪は、芽吹きはじめた雑木林やカラマツの森を柔らかく包んで、バステルカラーの景色に変えてゆきました。降る雪にかすむオヤマザクラやイタヤカエデの花に、私は言いたい感動を憶えたものです。これほど美しい花の情景を、今まで見たことがありませんでした。森は、雪だからといって冬のよくな厳しさではなく、生氣を放っています。私は

安曇野に遅い春がやつてきました。初めは、雑木林の冬芽がふくらんで樺色に見えることに気づきました。“山笑う”と俳人たちが季題にした、冬に終わりを告げる森の表情です。雪の間からは草花が、春を待ちきれないといつた顔で辺りの様子を伺っていました。

これから間もなくすると芽吹きが始まつて、冬将軍は遠ざかつたかに思えます。しかしながら朝、少し標高の高い所は真白い見事な樹氷になつていてこれが珍しくありません。春になつても、冬と背中合わせの安曇野です。

しかし、何と幸運な巡り合わせだったのでしょう。昨日（1997年4月10日）のことで、人類が今までに目撃した彗星の中でもトップクラスといわれるヘル・ボップ彗星は、北アルプス北部の空に昴や月と並んでいました。月の位置は一日で十数度も違い、この配置はたつた一夜しかないので、天候に恵まれることを祈るような気持ちで待つていたのです。



願いが通じたのでしょうか。前日までの雨や風が安曇野の春霞を奇麗なくしてくれたのですから、ホール・ボップ彗星は、私の想像をはるかに超えた美しい星空に現れました。夢にまで見た、劇的な星空の風景です。何枚も何枚もシャッターを切りながら、何かが私の撮らせてくれているにちがいないと感じました。

今日、北アルプス北部は再び雲に覆われ、山沿いはとき折り風雨に見舞われています。

安曇野は夕焼けの見られる日がほとんどありません。西の空が珊瑚色か亞麻色に淡く染まるだけです。すぐ目の前に北アルプスが連なっていますから、西の空が隠れて見えないです。

中山山地と呼ばれる山並みが安曇野の東にあり、そこからは夕焼けが見えます。たおやかな山並みの向こうに横たわる北アルプスのいずれかの山に、夕日が沈んでゆきます。

黄砂で昼間から太陽が黄色く見えた日、撮影の用意をして、中山山地へ向かいました。日が西に傾くと、空の柔らかな光が、雪どけがすんで姿を現してきた獅子や鶴、種まき爺さんといった、山腹に残った雪形を薄色に染めてゆきます。



白馬岳での夜空は人影も物音もなく、ときおり風の音が通りすぎてゆくだけです。昨日、

黄砂に包まれた夕日は、地平から出たばかりの満月を思われる黄金色でした。また、思ひもよらぬことに、鹿島槍ヶ岳の二つのピークの間に落ちてゆきました。私は、日が沈んだ後も、茫然と空を眺めていたものです。このような夕日は、もう一度と見ることができないのかもしれません。

夜明けの空は、いつもにぎやかでした。放射状に広がる黄金色や緋色の光。凸レンズ状の光が膨らんでゆく地平線。高い空の雲と、下に広がる雲海とが交わる水平線。そこに浮かぶ島々。

これまで数えきれないほど私は、七色の光に彩られてゆく東の空をじっと見つづけてきました。その都度、これからどのような世界が展開されるのだろうかと瞳を凝らしたものでした。それは、空という巨大なキャンバスに描かれてゆく、光の絵筆に他なりませんでした。ほんのひとときしか見ることのできない絵です。これほどはかなくて美しい光景が他にあるでしょうか。折りをみて、見に来ほしいですね。きっと、自然の中へ心が解き放たれることでしょう。



槍ヶ岳に登ってきたのですが、雄大なプロツケン現象に出会いました。どこでも広がる雲海に、丸い虹に包まれた自分の影が写し出されたのです。風が強い日でしたから、大波のような雲がすぐ脇の北鎌尾根を次から次に乗り越えてゆくにつれ、プロツケンは、近づいたかと思えばすぐに遠ざかってゆくでした。

ブロツケン現象に出会うには、ちょっとしたコツがあるのです。それは高山の稜線上に立つて、稜線を境に、太陽と霧や雲が対峙したときがチャンスです。つまり、その霧や雲がスクリーンとなって、丸い虹に包まれた自分の影が映し出されるのです。ですから私は、夕暮れどきからひと晩中、星空を眺めています。今まで出会ったことのない満天の星空だったからです。



安曇野の灯が下に見えていました。その向こうは信濃の山なみが続き、いつしかオリオンの三つ星が姿を現しています。やがて東の空がしらみはじめる、ひとつが太陽を引つ張つてくる」と言っていた友人のことを私は思い出しながら、刻々と変わつてゆく光のドラマを見つめています。白馬山荘から、点々と懐中電灯の光が揺れながら近づいてきます。間もなく夜が明けるのです。

高山では他にも、珍しい虹に出会いました。たとえば、日暁、月の暁、彩雲などです。気象の変化が激しいからこのような自然現象がよく現れるのでしょうか。いつも思いがけず出会うものですから、ますます山のとりこになってしまいます。

条件がそろつたときは霧や雲の流れを注意ぶかく見ています。高山では他にも、珍しい虹に出会いました。たとえば、日暁、月の暁、彩雲などです。気象の変化が激しいからこのような自然現象がよく現れるのでしょうか。いつも思いがけず出会うものですから、ますます山のとりこになってしまいます。

撮影に夢中になつてゐるとき、遠くから物音が聞こえます。周囲を見回すと、雪渓を隔てた三百メートルほど先のダケカンバの木の下に、熊がいるではありませんか。おそらく、ネマガリダケの竹の子を食べているのでしょうか。ちょっと不安がよぎりました。が、やがて熊は、私の心配をよそに視界から姿を消してゆきました。訪れる人もいないこのようないところだからこそ、トガクシショウマが残つていたにちがいありません。



先日、すでに紅葉が散りはじめた涸沢に星の撮影に出かけました。涸沢カールの底にテントを張ったのですが、予想はずれて、穂高の峰々は雲に隠れていたのです。夕方になると天候は回復せず、青空はおろか、天気がよくなる気配はありません。私は撮影をあきらめ、明日の夜に期待して今日は早く休もうと思っていたときです。ふと気になつてテントの外を見ると、目を疑いました。あの雲はどこへ行ったのか、シルエットになつた穂高の稜線に深い群青の空が広がり、星がいっぱい煌めいています。

さっそく防寒着をつけて飛び出し、カメラを三脚に固定しました。やがて、ほつと白く見える銀河の中で、ひときわ明るい星が集

まつた射手座付近が北穂高岳から涸沢岳の空にさしかかりました。見事な星明かりです。私はレンズに霜が降りなければよいがと気になら、便りを書いています。山の天気はどう変わるのが分からぬものだと、つくづく感じています。



安曇野は急に空気が澄みわたつて、朝露が降りるようになりました。まだ十月に入つたばかりなのですが、大陸から高気圧が張り出していくたびに、寒さが増してくるのです。この季節は、朝露が凍りかけていることがあるかと思えば、霜が降りてあたり一面が真白になることもあります。ですから私は、晴れで風のない夜に地表の熱が奪われる放射冷却現象が起きそうな日には、朝早く起きて野山を歩きます。思つたどおり、冬支度に入つた千草の草紅葉が霜に縁どられたりする

と、カメラをセツトして、朝日が射すのを待つてゐるのです。

草紅葉の表情はさまざまです。名残りの紅

葉には行く秋を感じるし、枯草に降りた霜には、冬がすぐ隣まで来ることを感じます。

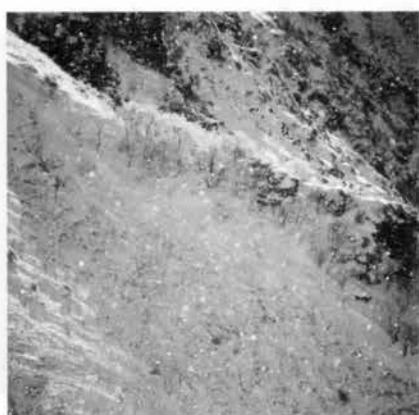
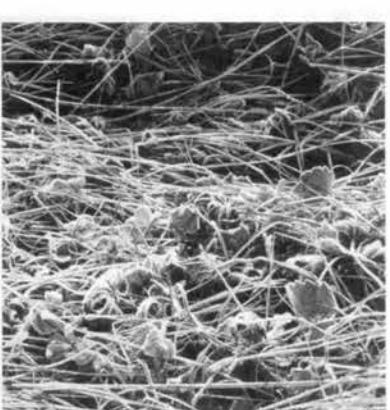
数日前から、標高二〇三五メートルの王ヶ頭に建つ高原荘に泊まつてゐるのですが、今日はよく晴れて、目の前には真白い美ヶ原の溶岩台地が広がり、南アルプス、富士山、八ヶ岳、浅間山などが一望できました。

実は、ここのお一人の小澤さんは友人であり、いつもお世話になつてゐるのです。今回も、冬景色を撮りに来てはどうかと、呼んで下さつたのです。

ジープと雪上車を乗り継いで嚴冬の美ヶ原へやつてきた甲斐があつて、今朝はダイヤモンドダストが撮れました。ダイヤモンドダストは、大気中を降りてくる細い氷の結晶が日光に輝いて見えるときのことを言うのですが、

それが、綺麗な星空が見える夜は、星空の写真を撮つています。星空は、四季それぞれに表情が違つてました。たとえば、ピーン

果たして、再び宇宙のかなたに旅立つてゆくハレ彗星が、たくさん星が煌めく八ヶ岳の上で、かすかに白い尾を引いてゐるのでした。



けの星空にハレーを入れて撮影するにはどの山がよいのか方位や高度を地図で調べた結果、美ヶ原へ向かいました。

果たして、再び宇宙のかなたに旅立つてゆくハレ彗星が、たくさん星が煌めく八ヶ岳の上で、かすかに白い尾を引いてゐるのでした。

それから、綺麗な星空が見える夜は、星空の写真を撮つています。星空は、四季それぞれに表情が違つてました。たとえば、ピーン

ちらして見えるほど、星がまたたくこともあらのです。また、目を疑うほどたくさんの星がきらめいていて、それは星が降つてくるように見え、そんなようなとき私は、安曇野は星の降る里だと感じるのです。

山と博物館 第43巻 第4号
発行 〒長野県大町市大字大町八〇六一
大町山岳博物館 TEL〇二六一-二三一〇二二
印 刷 大糸タイムス印刷部
郵便振替口座番号〇〇五四〇七一三九三